

大阪府南河内郡の千早赤阪村に「府立千早山の家」がある。近鉄の富田林駅とんだばやしからバスで約四十分。金剛山こんがざん登山口から歩いて二十分ほど登ると千早神社、その近くに和風の立派な研修会館が二棟建っている。本来「存道館」という。

ここは六百七十余年前（一三三二年）、楠木正成まことしげ（大楠公）が、鎌倉から攻め寄せた大軍勢を相手に半年以上奮戦して「建武中興」への道を切り拓いた千早城の遺蹟にほかならない。大楠公ゆかりの史蹟は、河内長野市の観心寺かんしんじから神戸市の湊川神社みなとがわまで数多くあるが、往時の苦難を偲ぶには、この峻険しゅんけんな古戦場跡が最高であろう。

かような史蹟に「存道館」が創建されたのは昭和十一（一九三六）年秋。それを可能にしたのは、当時の大阪府知事安井英二氏である。その前年、四十五歳の若さで着任すると、時あたかも正成戦死から六百年にあたり、大阪では大楠公ブームの最中だった。そして府内外の有志から「千早城址しよしに楠公道場を作ろう」という要望が出てきたのである。

ただし、安井知事は慎重に「関係する人々が……ただ時の流れに乗ってしまうのでは困る。その運用管理がそれにふさわしいものでなければならぬ。……そこで誠意と熱意が盛り上がるまで抑えていた」。その上、まもなく実施に踏み切ってからも「工事は……いわゆるお役所仕事ではなく、皆で真心こめて作ろうという事になり、勤勞奉仕的に学校の先生も生徒も参加した」という（『安井英二先生談話』信学社刊）。

しかも、この知事が偉いのは、ここを単なる研修施設ではなく、「大楠公の精神を学び取る文武両道の修練道場」とするために、勉学用の「文館」と武道用の「武館」を作り、その指導を東京大学教授の平泉澄博士に求められたことである。それに応えて、当時四十一歳の平泉博士は、この道場を幕末の志士真木和泉守まきじゆかみ作『楠子論』の中に「以て万世の道を存す」とあるところから「存道館」と名づけ、青年教師や学生らの「鍛錬会たんれんかい」を実施して来られた。

この鍛錬会は、戦後数年中断したが、講話独立を機に再開され、今夏で五十回目を迎える。ところが、戦後「府立千早山の家」と改称された当館は、赤字財政の大阪府で維持不能となり、一昨年から地元の千早赤阪楠公史蹟保存会（TEL〇七二一一七二一一五八八）のボランティアが細々と管理しておられるにすぎず、もはや宿泊研修ができない。

そのため、日本学協会（TEL〇三一一三三八六〇四二二）主催の鍛錬会も、吉野を主会場とし、中日の八月二日（土）昼のみ当館で但野正弘ただの氏の講話を行う。また九月二十八日（日）にも「楠公に学ぶ会」を当館で開く。この両日は誰でも聴講できる集いにて、有志多数の参加を期待したい。